

## 「臨床薬理学」

日本臨床薬理学会 編

東京大学教授・薬理学

杉 山 雄 一

近年、ソリブジンとフルオロウラシル系薬剤との薬物間相互作用による致死的な副作用の発現をはじめとして、いわゆる薬害問題が後を絶たない。そのような中で、安全かつ有効な医薬品の使用方法について、社会的関心も非常に高くなっている。

臨床薬理学とは、1985年に日本臨床薬理学会体制委員会によって、“薬物の人体における作用と動態を研究し、合理的薬物治療を確立するための科学である”と定義されている(本書3頁から)。

本書は、設立後17年目を迎える日本臨床薬理学会が、学会として初めて編集した本であり、医学部や薬学部の研究者をはじめとして、実際に医療に携わっている臨床医や薬剤師など、各方面の専門家が幅広い内容を分担して執筆したものである。大きく分けて、第I章“臨床薬理学総論”、第II章“薬物治療学総論”、第III章“薬物治療学各論”、第IV章“その他の重要な事項”の4章から成る。

医師が個々の患者に対して最適な薬物投与計画を設定するうえで、フ

ァーマコキネティクスに関する基礎的な知識を持っていることが必須なのは言うまでもない。また、治療的薬物モニタリング(therapeutic drug monitoring; TDM)を行う際にも、適切な採血時刻を設定したり、結果を解釈したりするにあたり、最低限のファーマコキネティクスの知識がなければ、無意味な検査を依頼し、患者の負担を増加させることになりかねない。しかしながら、現在の医学教育において、ファーマコキネティクスに関する基礎的な教育が不十分であるという声が聞かれることも事実である。

本書では、ファーマコキネティクスにもかなりの頁数が割かれており、吸収、分布、代謝、排泄などの各過程について、具体的な例を交えながら非常に詳細に記述されている。そして、TDMがなぜ重要なのか、また、モーメント解析法などを含め、ファーマコキネティクスの知識を、TDMのデータの解釈などどのように応用したらよいかについても、わかりやすく説明されている。したがって、本書は医師あるい

は医学生にとって、現場に即したファーマコキネティクスの基本を学ぶために最適の本であると言えよう。

一方、薬剤師にとっては、臨床薬剤師として医師と対等に議論し、薬物治療に貢献するために、ファーマコキネティクスや薬理学の知識はもちろんのこと、各病態に対する薬物治療の基本となる知識を身に付けていることが必要になる。本書では、高齢者や肝障害、腎障害時などにおける注意点のほか、降圧薬、抗不整脈薬、糖尿病治療薬、向精神薬などに分けて、それぞれの種類や選択方法、適切な使用方法あるいは薬物治療の考え方などについて、詳細に解説されている。新しくなった薬剤師国家試験に対応するためにも、薬学教育の中でこれらの項目を積極的に取り入れていくことが必要であり、そのためにも本書は絶好の教科書となることは間違いない。

● B5 頁524 図197 表161 1996  
定価(本体9,200円+税) 7400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)